

# 公立 会津大学

プログラムの名称：プロジェクト卒業生240+

--一人ひとりの学生が初心を忘れずに志を貫くための支援策

プログラム担当者：コンピュータ理工学部 教授・学生部長 太田 光一

キーワード

- 1. 履修アドバイザー
- 2. 修学支援室
- 3. キャリア支援
- 4. リメディアル教育
- 5. 健康・メンタルヘルス支援体制

## 1. 大学の概要

会津大学は1993（平成5）年に日本で初のコンピュータ理工学を専門とする単科大学として福島県会津の地に誕生した。国際社会に通用するコンピュータ理工学分野の研究者・技術者・起業家を育成することを目標としている。

「地域から世界へ」と「to Advance Knowledge for Humanity」（人類の平和と繁栄のために発明・発見を行うこと）を建学の理念とし、開学以来全国でも類を見ないほど、多数の外国人教員をそろえ、国際的環境のもと研究開発・教育を行っている。

現在、教員の約4割は外国人教員であり出身国もロシア・中国・アメリカ他十数カ国に及んでいる。

日本全国から集まったコンピュータに興味を持った学生に、1人1台の高性能UNIXワークステーションが24時間自由に使えるという環境が与えられている。開学以来就職率はほぼ100%を維持するなど卒業生はコンピュータ業界で高い評価を得ている。

## 2. 本プログラムの概要

本プログラムは、日本全国から「コンピュータを学びたい」として入学してくる学生が、初心を見失うことなく入学定員240名に相当する数の卒業生を毎年輩出することを、目標としている。

このために、以下の支援を実施する。

### (1) 修学支援

合格から入学時までのリメディアル教育の拡充・強化  
修学支援室の設置による落ちこぼし防止

履修アドバイザーによる4年間の履修指導體制の確立  
FD、SDの実施

### (2) キャリア支援による学習のモチベーションの維持

### (3) 健康・メンタルヘルス支援体制の充実強化

相談室の充実

保健室を中心とした健康管理、食事指導、栄養指導

トレーニング室の運動設備の充実更新、運動指導體制の確立など

## 3. 本プログラムの趣旨・目的

本学の要求する厳しい勉学に耐えられずに留年したり退学したりする学生が多く、入学定員240人に対し、4年で卒業できる学生は約200人、留年者を含めても卒業生は毎年220人程度に留まっている。

また、最近では全国的に小中学生の理科離れが進んでおり、大学進学の中でも理工系の学部への受験倍率が下がっている。そのような中で、必ずしも十分な基礎学力・勉学の習慣や意欲を持たない学生が増えている。従来の、ただ単に教員が厳しく要求するだけではついていけない学生が多く見られる。そのような学生も、丁寧な指導を行って優秀な学生に育て、卒業させることが必要である。

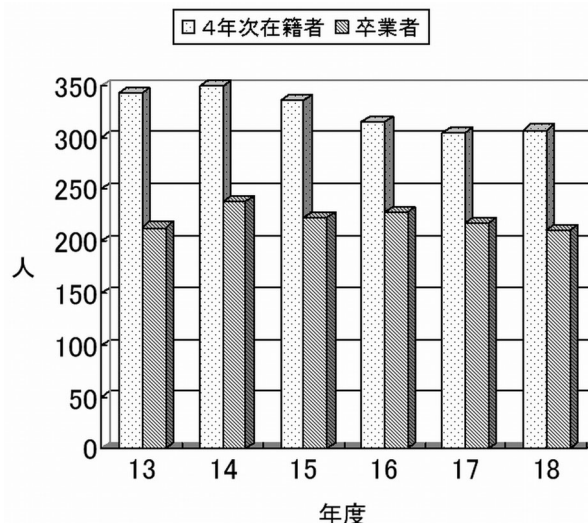


図1 卒業生数の推移

さらに、会津大学では来年度から、開学以来のカリキュラム大改訂を予定している。現行のコンピュータソフトウェア学科・コンピュータハードウェア学科の2学科体制を、5つのフィールド(専修)、9つのトラック(履修モデル)に改める。また、卒業に必要な128単位のうち98単位(76%)が必修科目だったところを、基本的にすべて選択科目とし、フィールドごとに推奨科目、先修科目を設定する。多数の必修科目で選択の余地がなかったところを、学生の多様な能力や希望に応じてカリキュラムを構成できるようにする。そのため、きめ細かな履修指導が不可欠となっており、GPAの導入、履修アドバイザーの新設などを予定している。

今回の取組は、これまでの本学の質の高い教育水準を維持しつつ、コンピュータが不可欠となっている社会の要求に質の面だけではなく量の面でも応えていこうというものである。具体的には、入学定員に匹敵する240名を毎年輩出していこうとする取組である。

### 4. 本プログラムの独自性(工夫されている内容)

#### (1) 修学支援の新たな取組

##### (i) リメディアル教育の充実

入学前に行っている推薦入試合格者のフォローを充実させ、さらに全合格者へと拡大する。これまでの手法を改善し、Webベースで課題を課すこととする。近年はほとんどの学生が自宅にパソコンを所有しており、ネットで課題を配信して返送することはそれほど難しくはない。これまでの郵送の方式と違い、学生は自分のペースで学習を進めることができる。

また、3月半ばに合格が確定する一般入試の合格者についても、Webベースの課題なら短期間で効果を発揮することができる。

そのための必要なソフトウェアや人員を確保する。

##### (ii) 入学直後のオリエンテーションの充実

新入生向けの合宿オリエンテーションに対して在学生のピアサポート体制を充実する。学習面での不安だけではなく、親元を離れて生活する不安に対しては、上級生のアドバイス、サポートが非常に有効であり、TAを雇用する経費を新たに確保する。

##### (iii) 履修アドバイザーの役割

新しいカリキュラム体制の下では、先修科目を見通した卒業までの全コースを見通すことが重要であり、専門的なアドバイスを行う教員を指名することとする。入学時を含め、学期ごとに履修アドバイザーによる履修指導を行う。新カリキュラムの下では、2年生修了

時に卒業研究のための所属研究室を決定する予定であり、履修アドバイザーが学生の希望を聞きながらできる限り時間をかけて指導していく。

#### (iv) 修学支援室の新設

これまでも基礎学力の欠けた学生に対しては院生が質問に応じる「授業理解補助TA」を配置してきた。また、数学の補講を実施してきた。これらのやり方を大幅に見直し、「修学支援室」を新たに開設する。質問に来る学生にその都度対応するのではなく、のぞけばいつでも誰かがいて気軽に勉強を教えてくれるような常設の部屋を学内に確保し、整備する。そこには嘱託の学習支援員、博士課程の院生ないしは博士修了生などを中心に複数の支援員を配置する。そのための経費を確保する。

#### (v) 学生による授業評価の改善

今年度よりシステムを更新し、学生がより容易に評価を入力でき、また統計分析が簡単にできるようにする。授業内容に対する学生の意見は、学期末の評価時だけではなく、常時入力ができるようにし、授業ごとの掲示板として活用できるようにする。

#### (2) キャリア支援の充実

従来の進路ガイダンスを充実させ、3年次の科目として単位化する。年間を通じてガイダンスを受講することにより、キャリア形成の視点からふだんの勉学の必要性を常に自覚させる。

1、2年次においてもキャリアに関する講座や授業を開講し、卒業生や社会で活躍する企業人から話を聞く機会を設けるなど自分の将来モデルを意識させていく。

また、履修アドバイザーは、将来の職業設計を視野に入れて履修科目を選択するよう、常に卒業時の達成すべき能力を考慮して履修指導を行うこととする。

なお、引き続き就職相談員によるキャリア支援を継続する。

#### (3) 健康・メンタルヘルス支援についての新たな取組

学生はコンピュータ演習室を24時間使用することが可能である。どの授業も多くの課題提出を求められ、学生は夜遅くまで大学に残っている。そのため生活が不規則になりがちである。

また、冬は積雪と寒冷のため遅刻する学生も目立つ。

##### (i) 健康の増進

ここ数年、肥満の学生の存在が危惧され、学生の運動不足が指摘されている。研究者用に研究室に近いと



写真1 冬の会津大学



写真2 学食での朝食の提供

ころに室内運動施設（SRLU）が開学以来設置されている。冬が長く外であまり運動ができないため室内の運動場は貴重である。従来の目的を一部変更し、学生の健康のための設備を導入、それらの設備を定期的使用するための指導体制を新たに確立する。具体的には、専門のインストラクターを委嘱して運動プログラムを作成し、学生ごとにカルテを作って、健康状態をチェックできるようにする。

(ii) 栄養指導

本学は男子学生が80%以上を占め、ほとんどが親元を離れて生活している。生活が不規則になるとともに食事時間、食事内容も不規則になりがちであり、栄養指導が必要となっている。定期的に栄養指導の講座と

クッキング教室を開設する。食堂にも協力を依頼し、栄養に関する啓発ビラやパンフレットを作成し配布する。

(iii) メンタルヘルス支援

コミュニケーション能力に問題がある学生が多くなりつつあることから、コミュニケーションスキルトレーニング講座を開設する。

(4) 相談体制の充実

現在1名の嘱託のカウンセラーに加えて、1名増員し、常時相談できる体制を作る。現在学生のニーズは多岐にわたっており、それらが何らかの精神的問題を抱えている場合が増えている。現状を考えると、将来

表1 2007年度体格指数（学生健康診断結果より）

	1年	2年	3年	4年	合計	%
BMI18.4 以下	22	16	12	17	67	7.87%
BMI18.5～25 未満	177	149	159	159	644	75.68%
BMI25～30 未満	34	18	23	34	109	12.81%
BMI30～35 未満	8	2	7	7	24	2.82%
BMI35～40 未満	2	0	2	0	4	0.47%
BMI40 以上	1	0	2	0	3	0.35%
合計人数	244	185	205	217	851	

肥満人数	140
%	16.45

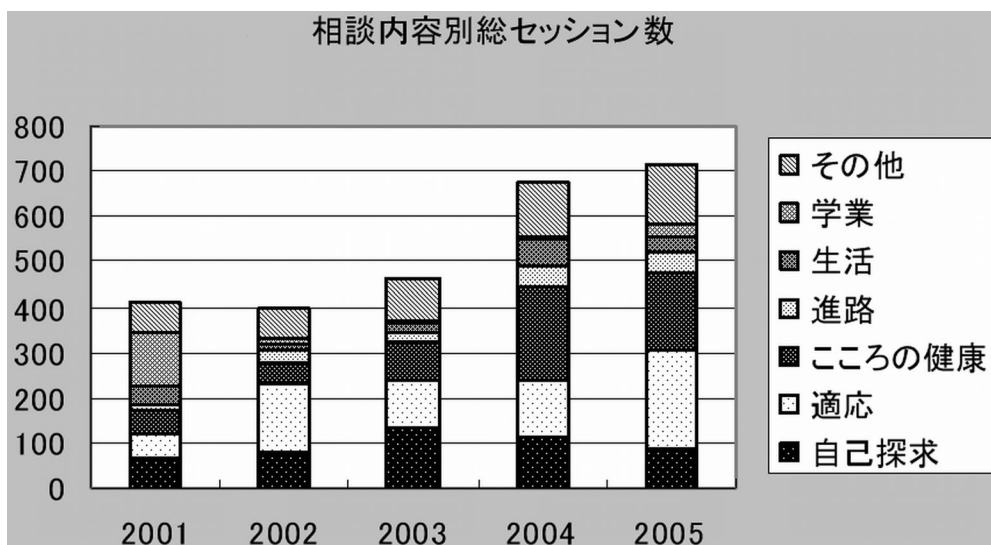


図2 学生相談室利用状況

的には、心理職の常勤化が必要と思われる。

カウンセラーが常駐している相談室、保健室、新設予定の修学支援室。これらを隣接させ、学生の悩みや相談に総合的に対処できるような体制を確立する。

また、学生課職員の支援能力の向上をはかるため各種講習会等へ積極的に参加する。

教員を対象とした講習会を学内で開催する。教員の中には、「やる気のある学生だけを相手にすればよい」という考えが依然根強い。意識改革が必要である。

## 5. 本プログラムの有効性（効果）

### （1）修学支援の新たな取組の有効性

#### （i）リメディアル教育の効果

高校生活から大学生活へのスムーズな移行ができるよう、入学前のリメディアル教育によって大学の学習についていけるだけの基礎学力を保証する。入学後ついて行けるかどうかという不安を解消し、希望を持って入学式・オリエンテーションに臨めるようになることが期待される。

#### （ii）入学時オリエンテーションの充実

入学時のオリエンテーションを丁寧に行うことで、勉学の動機付けを強めるだけでなく、同級生や上級生の友人・知人を作り、大学生活を楽しく過ごせる素地をつくる。落ちこぼれたり自室に引きこもっている学生に共通に見られる特徴は、友だちがいないことである。友だちがいることによって、欠席した授業の回復が可能になったり、期末試験の準備をいっしょにしたりできるようになる。教員に質問しにくいことも上級

生には気軽に質問できる。

#### （iii）履修の計画化による効果

本学ではこれまでほとんどの科目が必修だったため、学生が自ら履修計画をたてることはなかった。2008（平成20）年度から、学期ごとの履修登録の時期に、フィールドごとの履修指導を行う。ほとんどの学生がコンピュータに興味を抱いて入学してくる。しかし実際の勉学は、コンピュータとは一見無関係な数学や英語の課題の積み重ねだったりする。何のために基礎的な学習が必要なのか分らずに意欲を失っていく学生も毎年見受けられる。卒業後の将来設計を見据えながら履修科目を選択するよう、履修アドバイザーが指導することによって、常に学習意欲を維持し高めていく動機付けとなる効果が期待できる。

#### （iv）修学支援室設置の有効性

教員の研究室を訪ねて質問する学生は一般的にかなり学習意欲の高い学生である。ほとんどの学生にとっては研究室の扉は重く、また質問しようと思いついたときに教員が必ずしも在室しているとは限らない。そこで、だれかが常に在室していて気軽に訪問できる修学支援室を開設することで、消極的な学生のニーズに応えることができる。

留年生や休学から復学した学生などは、以前の友人との関係が切れてしまい孤独であることが多い。そのような学生も気楽に集まって学習し合えるような居場所になることが期待される。

また、学習のつまずきの原因が他の様々な要因と重なっていることが多いことから、カウンセラー室や保健室と連携できるように設計することにより、問題の

ある学生を多方面から支援することが期待される。

(v) 学生による授業評価

学生が授業評価を行うことにより、より主体的に授業に参加するようになる。

(2) キャリア支援

低学年のうちからキャリアを意識させることで、将来の目標が具体化するとともに大学での勉学への動機付けを高めることが期待される。

(3) 健康・メンタルヘルス支援の新しい取組の有効性

当地は冬は雪深く、特に冬期間の朝の授業を遅刻・欠席する学生が多い。運動不足や肥満を防止し、規則正しい生活を促し、朝きちんと起きられるような生活習慣をつけていくことが、確実に単位を修得していくために必須である。本学は理工系であり重要視されている数学と英語の科目は積み上げが大事である。生活リズムを維持し、きちんと出席することが卒業への近道である。

(4) 相談体制の充実による効果

カウンセラーの常駐化、修学支援室の開設、健康面での支援など、カウンセラーや看護師による専門的な学生相談と、全教員による日常的な学生支援との連携を図ることで、問題を抱える学生を早期に発見し対応することができる。

## 6. 本プログラムの改善・評価

(1) 新たな取組を評価する体制・方法

教務委員会で成績判定の資料を作成し、部局長会議や教授会で学期ごとに現状を分析、進行管理する。各学年の難関科目と具体的な数値目標を掲げ、その達成に努める。

毎年度ごとに大学内の評価室による1次評価を実施し、学外有識者を加えた学生支援GP評価委員会を設置する。

また、外部委員を委嘱する予定である。

(2) 評価の観点

(i) 科目の不合格者の数が減少しているかどうか

本学では、1年生の微積分や力学、2年生の離散系論やフーリエ解析など、コンピュータ理工学を研究する上での基礎科目について、毎年20%以上の学生が単位を一度に修得できず、再試験や再履修を余儀なくさ

せられている。ほとんどの場合、途中でやる気を失って授業に出席しなくなることが直接の原因である。

各学年の難関科目と目される科目の不合格者が20%以内におさまっているかどうか、取組の成否の第1の指標となる。さらに、どの科目も不合格者を10%以内に抑えるような目標を4年後には達成したい。

(ii) 退学者の減少を目指す

現在毎年30名以上にのぼる退学者と休学者の数を減らすように努める。学生自身が最初から不本意入学で進路変更を希望している場合は別として、入学時に会津大学を志した学生の退学者をできるだけ減らすようにする。

(iii) 肥満者の減少を目指す

定期健康診断の結果及びBMI値の高い学生を追跡調査していく。

(iv) 卒業者の数が240に達したかどうかを指標にする

毎年できるだけ240人に近づけ、計画最終年には240人以上の卒業生を輩出することをもって、この取組の成否の指標とする。

## 7. 本プログラムの実施計画・将来性

(1) 2007(平成19)年度

- ・修学支援プロジェクト担当職員の雇用
- ・修学支援室開設・支援開始
- ・自学自習支援システム導入・運用
- ・キャリアガイダンス
- ・エクササイズルームの整備
- ・運動プログラム指導員の配置
- ・栄養指導講座、栄養指導パンフレットの作成
- ・クッキング教室
- ・カウンセラー増員
- ・教職員の講習会参加、コミュニケーションスキルのトレーニング

(2) 2008(平成20)年度

- ・2007(平成19)年度に加えて、教職員向けのメンタルヘルス講習会の開催
- ・自学自習支援システム保守・改善
- ・外部評価委員会の開催

(3) 2009(平成21)年度

- ・前年度に同じ

## 事例23 会津大学

### (4) 2010(平成22)年度

- ・前年度に加え、実施報告書作成
- ・フォーラムの開催

### (5) 補助期間終了後の計画

現在大学の職員は、3年程度で異動する県からの派遣職員であるが、来年度から計画的に専門職員の採用

を開始する。この補助期間終了時までには、学生関連職員の高度化をはかり、自立して本事業を継続できる体制を構築していく予定である。

本学の中期目標は現在2年目であるが、次の中期目標に向け条件を整備して、この取組の継続を進めていく予定である。

#### 選 定 理 由

会津大学においては、1993(平成5)年の開校以来、学生支援に関する目標等に基づき、具体的かつ組織的に学生支援を実施しており、その結果、コンピュータ理工学専攻の学生に特有の課題を克服するために、修学支援・キャリア支援・健康・メンタルヘルス支援等に積極的に取り組んでいます。

また、今回申請のあった「プロジェクト卒業生240+」の取組は、従来の取組に対する客観的な評価結果を基にして、特に留年・退学などに代表される学業を途中で放棄する学生を減らし、質を維持しつつ量の拡大を目指して入学者全員が卒業することを目標とした組織的で実践可能性の高い取組として高く評価できます。

特に、コンピュータ理工学専攻の学生の陥りやすい問題の分析を丁寧に行い、その結果である、リメディアル教育を含んだ修学指導・食事指導・栄養指導・運動指導の体制化はユニークであるとともに、同様の大学等のモデルとなる取組であり、また、学生支援に関わる複数の組織の統合化、学生支援に関する教職員の専門家志向は、他大学等の参考となる優れた取組であると言えます。

今後、コンピュータの専門家であるだけでなく優れた職業人となるため、地域の企業等の協力を得て、学生の社会的発達を促すことが付け加えられることで、目標の達成に一層貢献できると考えられます。